

ブックショート 10月期応募作品

あなたの幸せ、

わたしの幸せ

山岸遼

【人物】

八代萌（27） 会社員

矢作恋歌（29） ブライダルスタッフ

萩原玲（27） 新婦

正木清志（57） 玲の父

萩原保（27） 新郎・萌の浮気相手

【あらすじ】

浮気相手が親友と結婚し憂鬱な萌は、式場スタッフの幸薄女性恋歌と出会う。恋歌の提案により、この世界から逃げ出す旅に出る。そしてパワースポットを訪れ、2人で過ごすうちに、萌は幸せは誰にも決められない。自分で決めるものだと思いついた。

【本文の文字数】

4388文字

○結婚式場・外観

豪華なチャペルが聳え立つ。

○同・チャペル・外

制服を着た矢作恋歌（29）、扉を開く。

萩原玲（27）、正木清志（57）の腕に手をかける。中に足を踏み入れる。

○同・同・中

大勢の参列者に見守られながら、玲と清志はバージンロードを歩いていく。バージンロードの先では、萩原保（27）が口を真一文字に結んで玲と清志を見つめている。恋歌は満面の笑みを浮かべて玲を眺めている。

中ほどの席いる八代萌（27）、玲を見つめている。その視線を保に移す。

萌「……」

萌、ふっと笑みをこぼす。

○同・喫煙所（夕）

窓の外、雨が降っている。

恋歌、入る。窓の外を見て、ため息をつく。乱雑にポケットからタバコとライターを出す。

恋歌「……」

恋歌、座る。タバコに火を点けて、ふかす。そしてさっとシャツの第一ボタンを外す。

窓の外、雨が打ち付ける。

萌、入る。

萌「幸せに、なりたいですか？」

恋歌、驚いて、咄嗟に火を消す。取り繕った笑顔を見せて、

恋歌「……大変失礼いたしました！」

萌、苦笑して、

萌「気にしないで」

と、タバコを一本取り出して、恋歌に

渡す。

恋歌「？」

萌「お詫び」

と、灰皿のタバコを見る。

少ししか吸われていない長い吸殻。

萌「吸い始め、だったでしょ」

恋歌「……ああ、すいません」

と、タバコを受け取る。啜える。

萌、恋歌のタバコに火を点ける。

恋歌「ありがとうございます」

萌、タバコを取り出し、火を点ける。

一度大きく息を吐き出すと、座る。

萌「我慢できなかった？」

恋歌「え？」

萌「だって、この人でしょ。さっき扉開けてたし」

恋歌「ああ、はい」

萌「従業員休憩室に喫煙所はあるだろうし、でもここで吸ってるってことは、相当吸いたかったのかなと思って」

恋歌「……」

恋歌、ぎこちなく笑う。

恋歌「すいません」

萌「いいのいいの、私だってかなりのヘビーだから」

と、タバコの箱を揺らす。

窓に打ち付ける雨。

恋歌「……あの、私、不幸に見えますか？」

萌「あ、ごめんなさい。そうじゃなくて、さつきとギャップすごくて」

恋歌「さつき？」

萌「保、あ、いや、萩原さんの挙式」

恋歌「ああ……」

萌「ずっと笑顔だったから。よくあんなにも他人の幸せを祝えるものだなと思って」

恋歌「私を見ないでくださいよ」

萌「ごめんなさい。でも今のあなたはさつきのあなたと全然違う」

恋歌「……」

恋歌、笑みをこぼす。

恋歌「だって、仕事ですから」

と、息を炊き出す。タバコの煙が宙に舞う。

○同・宴会場・外（夕）

『萩原保・玲』『披露宴』を示す立て看板。

○同・同・中（夕）

プロジェクトを通して、保と玲の結婚を祝う動画が流れている。

玲は涙交じりに見ている。

保は笑顔で見ている。

○同・喫煙所（夕）

灰皿には、吸殻が数本捨てられている。

缶のブラックコーヒーで乾杯をする恋

歌と萌。

萌「何の乾杯かわからないけど」

恋歌「私たちの不幸に？」

萌「私も不幸に見えてんだ」

恋歌「違いますか？」

萌「ノーコメントで」

恋歌、タバコを一本取り出し、萌に渡す。

恋歌「お返しです」

萌、受け取って、

萌「ありがとう」

恋歌、萌のタバコに火を点けて、自身のタバコにも火を点ける。

萌「仕事はいいの？」

恋歌「勤務時間はとっくに終わってます」

萌「そうなの？」

恋歌「でも、ここで吸ってるのバレたら怒られる」

萌「だろうね」

恋歌「…披露宴はいいんですか」

萌、苦虫を噛み潰したように息を吐き出す。

萌「それ訊く？」

恋歌「私も、あなたのごことは挙式のごときから
少し気になっていました」

萌「どうして？」

恋歌「一人だけ、取り繕った祝福を送って
いるような気がしたんです」

萌「何それ？」

恋歌「他にもいるかもしれませんが、あなた
からそういうオーラを感じ取った。いるん
です、中には心からの祝福を送れない人」

萌「わかるもの？」

恋歌「この仕事長いので、割と敏感かも」

萌、苦笑して、

萌「その通りよ」

恋歌「やっぱり」

萌「元カレなの。新郎」

恋歌「……ああ」

萌「一応名譽のために言っとくと、浮気とか
じゃない。新婦と付き合う前にね、一年く
らいかな」

恋歌「……今も？」

萌「ないない。だから、ドラマとかでよくあるような、『ちよっと待った！』的なやつじゃない。そういうのじゃない。ただね――」

萌、言葉を呑み込み、ぐいとコーヒーを飲む。

○同・披露宴会場・中（夕）

玲、保の耳元に顔を近づけて、

玲「ねえ、萌どこ行ったの？」

保「え？」

と、当たりをキョロキョロして、

玲「さっきからずっといないんだよね」

保「え、そうなの？」

玲「うん、なんかあったのかな？」

保「まあ、大丈夫じゃない？」

玲、不安そうに頷く。

○同・喫煙所（夕）

窓の外、大雨。

恋歌、コーヒーを飲む。

萌、タバコを灰皿に押し当てて、

萌「元カレの結婚式に行ったことある？」

恋歌「……いない」

萌「ああ。……じゃあ行く人って、いる？」

恋歌「統計取ったことないからわかんないけど、少数かな」

萌「だよね」

恋歌「どうして来たの？」

萌「玲、あ、新婦が親友なの」

恋歌「ああ……」

萌「というか、新郎新婦と私、小中高と一緒に、サンコイチだった」

恋歌「恋愛に発展するんだね」

萌、タバコを取り出す。が、箱に戻して、

萌「付き合って、振られて、振られたと思っ

たら、親友と結婚した」

恋歌「付き合ってたのはいつ？」

萌「2、3年前？」

恋歌「そっか」

萌「もっと複雑なのが、私と付き合ってたことを新婦が知らないってこと」

恋歌「ああ……」

萌「新婦は、私が一番祝福してるって思ってる。してないわけじゃないけどね、わかる？」

恋歌「わかる」

萌「幸せになりたいけど、私はなれない」

恋歌、徐に窓の外を眺める。

恋歌「……ねえ、逃げ出さない？」

萌「え？」

恋歌「この世界、この建前だらけの世界から」

萌「……正気？ 初対面、今偶然会っただけだよ」

恋歌「だね。だけどそういう気分になったから」

と、タバコを灰皿に押し付ける。

恋歌「私、矢作恋歌」

萌「急な自己紹介」

と、苦笑して、

萌「……私は八代萌」

恋歌「出席番号前後じゃん」

萌「確かに」

恋歌と萌、顔を見合わせて笑い合う。

○路面電車（夕）

雨は上がっている。

路面電車がゆっくりと駆けていく。

○同・車内（夕）

ほとんど乗客はいない。

恋歌と萌は隣り合わせで座っている。

萌はうとうととしており、恋歌の肩に寄

りかかる。

恋歌、徐に萌を見つめる。そしてそっ

と微笑む。

○結婚式場・喫煙所（夕）

保、入る。

が、誰もいない。

保「……」

どうしたものかと首を傾げる。

○ラブホテル・外観（夜）

ネオン輝く古びた建物。

○同・一室（夜）

萌、どかっとベッドに寝転がっている。

ソファにはスーパリーの袋。食品や衣類が入っている。

恋歌はシャワーからあがって、

恋歌「先お風呂ありがとう」

萌、さっと起き上がった、

萌「変な感じ」

恋歌「普通のホテル、どこも満室だった」

萌「だけじゃなくて、状況すべてが」

恋歌、萌の隣に座り、

恋歌「それはもちろんそう」

萌、ふっと笑みをこぼし、

萌「仕事は？」

恋歌「明日は休み」

萌「そう」

恋歌「ね、迷惑だった？」

萌「だったら来てない」

と、立ち上がり、

萌「シャワー浴びてくる」

と、奥に消える。

恋歌、どこか悲しそうに萌を見つめる。

○回想／八代家・リビング

キッチンで洗い物をする萌、思わず水

道の水を止める。

萌「どういふこと」

保はテーブル席で、拳を握り、俯いて
いる。

保「結婚するんだ」

萌「待ってよ、聞いてない」

保「だから関係を解消したい」

萌、保の傍に駆け寄って、

萌「相手は誰」

保「……」

萌「答えて」

保、萌を一瞥して、

保「玲だ」

萌「え……」

萌、血の気が引いたように、その場に
すんと立ち尽くす。

○ラブホテル・一室（深夜）

ベッドに横並びで眠る恋歌と萌。

萌は徐に目を開く。傍にあるスマホを
手に取り開く。

画面、保とのLINEのやり取り。

『大丈夫？』『どこ？』などのメッセー
ジ。

萌は何も返していない。

萌「……」

萌、大きく息をつき、再び目を閉じる。

○明け方

○道1（朝）

周囲には木が生い茂る。

延々と連なる階段。

ちらほらと人がいる。

恋歌と萌、横並びで歩いている。

萌、大きくあくびをする。

恋歌「眠れなかった？」

萌「ちよつとね」

恋歌「大丈夫？」

萌「うん……」

てくてく歩いていく2人。

○×△天神宮

鳥居の奥、きらびやかな拝殿が聳え立つ。

人々は手を合わせ、拝んでいる。

向こうから恋歌と萌、やって来て、

萌「ここが目的地……」

恋歌「日本最大のパワースポット、×△神社」

萌 「うちらにはうってつけてことか」

と、恋歌と顔を見合わせてニヤリと笑う。

× × ×

ちゃりんちゃりと金を鳴らす恋歌と

萌。二礼二拍手一礼。

目を閉じ手を合わせる恋歌と萌。

恋歌、ちらっと目を開け、徐に萌を見やる。

○カフェ・外観

神社近くにひっそりと佇む隠れ家的カフェ。

○同・店内

客はまばら。

窓際の席、恋歌と萌は向かい合わせで各々パフェをついている。

萌 「何を願ったの？」

恋歌、ひとくち食べて、

恋歌「私の幸せ」

萌「……」

恋歌、萌を一瞥して苦笑。

恋歌「笑ってよ」

萌「どうして、私を連れ出したの？」

恋歌「この世界から逃げ出したいように見え

たから」

萌「それだけじゃないでしょ」

恋歌「……私、愛せないんです」

萌「え？」

恋歌「男の人を」

萌「ああ……」

恋歌「それですっと、幸せにはなれないと思

ってた」

萌「好きになった？」

恋歌「え？」

萌「私のこと」

恋歌、ピタッと静止。徐にスプーンを

置いて、

恋歌「わかんない」

萌「なにそれ」

恋歌「そうかもしれないし、そうなるかもしれない」

萌「うん」

恋歌「でも……」

と、言葉を呑み込み、萌を見つめて、

恋歌「あなたには幸せになってほしい」

萌「……」

恋歌「そうなる手助けが少しでもできればって、連れ出した」

と、微笑む。

萌、真剣な目つきで萌を見つめる。

○カフェ近くの道（夕）

萌、電話をしている。

保の声「よかった。どこいるんだよ」

萌、スマホをきゅっと握って、

萌「……帰らない」

保の声「え？」

萌「当分帰らないから」

保の声「どういうこと？」

萌「あなただって幸せに暮らしたいでしょ」

保の声「はい？」

萌「帰ったら玲に話しちゃうかも」

保の声「ちょ、ちょっと——」

萌「なーんてね」

と、いたずらっぽく笑って見せて、

萌「でももう関係は終わり」

保の声「お、おい、それって」

萌は電話を着る。そしてふーっと息を

吐き出し、スマホをしまう。

カフェから恋歌が出てくる。

恋歌「お待たせ」

萌「うん」

恋歌「あれ、どうした？」

萌「え？」

恋歌「なんか、スッキリしてる」

萌「ああ、別れた」

と、ニヤリと笑う。

恋歌「おめでとう」

萌 「ありがとう」

と、顔を見合わせて笑い合う。

萌 「一緒に戻らない？」

恋歌 「どこに？」

萌 「建前だらけの世界に」

恋歌 「本気？」

萌 「そんなに悪くない世界だと思うから。恋

歌さんがいれば」

恋歌 「好きになるかもよ？」

萌 「そのときはちゃんと考えるから」

恋歌 「うん、帰ろうか」

萌、ひとつ頷き、歩き出す。

恋歌も続く。

2人の背中を夕日が照らしている。

(おわり)